

<エッセイ>

高学歴理系女子が受ける暴力

Social violence suffered by highly educated female in STEM

えもりえも

Emo Emori

I. アイドルユニット「学歴の暴力」とは？

私は普段、秘密の組織の研究者として働いている理系女子であるが、ちょっと前まで「学歴の暴力」というアイドルユニットをしていた。「学歴の暴力」はメンバー全員が旧帝大卒女子であり、平日は社会人として働いており、休日に趣味でアイドル活動をしているユニットだ。セルフプロデュースで運営しており、高学歴女子の苦悩を表現した歌詞をメンバーで作詞したり、自分達でライブを企画したり、SNSで思いや仕事の苦勞を発信したりと、ちょっと変わった自由で楽しいアイドルだ。



写真 1. プロフィール写真 (筆者提供)

「学歴の暴力」を作ったバックグラウンドには、高学歴女子であることにより社会から受ける暴力がある。その鬱憤を晴らすために作ったのが「学歴の暴力」だ。高学歴は真面目でなければいけないという固定概念を破壊し、高学歴であるからと言ってやりたいことを我慢

する必要はない、キラキラと好きなことをして良いということを体現したかった。高学歴アイドル活動をする上でよく言われることに「頭がいいなら、もっと社会の役に立つことをしろ」というのがある。なぜ頭がいいと自分の好きなことをしてはいけないのか。こういった自分達の気持ちを発信するとともに、世の高学歴女子の不満を代弁し、高学歴でも自由でいいというメッセージを発信すべく、活動している。

II. 高学歴女子が社会から受ける暴力

高学歴女子が社会から暴力を受けているといっても、多くの方には想像しづらいかもしれない。まず、見えにくいものとして「高学歴女子になるまでに受ける暴力」がある。これはもうどうしようもないことかもしれないが、私にとってそれは生理だった。高校生の時に散々苦しめられた存在である。生理中1週間はおなかが痛い・眠い・勉強に集中できないことに加え、生理前1週間もイライラしたり、時にはなぜか涙が止まらなくなったりすることもあった。月の半分が体調不良であり、それは如実にテストの点数という形で表れた。一月のうち体調の安定した2週間に受けたテストは割と成績が良いが、体調の悪い2週間に受けたテストは成績が良くない。自分の努力に関係なく、点数に影響してしまうのは悔しかった。このようなPMS（Premenstrual Syndrome：月経前症候群）による不調は、男性からは理解されにくいことはもちろん、女性の中でも個人差があるため理解してもらえないことも多い。こうした体調的なハンデがあることを周囲に理解されない中、一発勝負の受験という土俵で戦うことを強られる。これも一つの暴力だと考える。

さらに「高学歴女子が社会に出て受ける暴力」もある。せっかく学歴や能力をつけたのなら、それを生かして働きたい。でも家庭も作りたい。これは男性なら両立できることであり、むしろ両立させることでうまくいくことが多い。しかし高学歴女子においては両立が難しい。まず、異性との出会い・結婚において、女性は相手より高学歴だと嫌厭されてしまうことが多い。私自身も地元の合コンで「〇〇大学*はセーフ、京都大学はアウト笑」と言われたことがある。また、出産や育児によりせっかく築いたキャリアプランが寸断されてしまうことが多い。研究職の場合は日々目まぐるしく変わっていく情勢についていけなくなることは大きな損害だ。

III. 理系女子が社会から受ける暴力

理系女子になってくるとこれらの「暴力」はますます強くなると体感している。まず「高学歴理系女子になるまでに受ける暴力」として「数の暴力」がある。理系女子は我が道を行くタイプや自分をしっかり持っている子が多い。むしろ、そういった女子でしか理系は選択できないのではないかと思われる。理系はやはり男子が多い。私はどちらかという気が弱いタイプの女子だった。男子が苦手だったので高校で進路選択の時に男子が多いという理由

* 某県の新制国立大学

で理系に進むのを躊躇った。「教室移動の時に一人だったら嫌だなあ」など不安がたくさんあった。理系に興味があるけど、「数の暴力」が理由で排他されてしまった気の弱い女子は実はたくさんいるのではないかと考える。

こういった困難に打ち勝っても、理系女子となり社会に出た途端「高学歴理系女子が社会に出て受ける暴力」がある。「数の暴力」は継続しており、例えば私が社会人になって初めて所属した研究所において経験した暴力の一つに、女子トイレの鍵が壊れたまま1年間使わなくてはいけなかったということがある。研究所に今まで配属された女子がいなかったため、鍵が壊れていることに誰も気付かなかったのである。修理を持ちかけたが、当時フロアに女子は私一人しかいなかったため「あなた以外使う人はいないから、開けられる心配はない」と言われ、直してもらえずスリリングなトイレ生活を1年間続けることになった。

また、理系女子が活躍するロールモデルがないことも、障害になった。私は就職の時、本当は都会でもどこでも自分の興味のある分野に行ってバリバリ働きたかった。しかし人生全体を考えた時に、出産・育児と両立できるイメージが持てず、前例も知らなかったので諦め、地元で実家の力を借りて仕事と家庭を両立する道を選んだ。女子でなければ就活でこんな障害はなかったと思っている。

IV. 暴力を軽減するために

このように「高学歴女子・高学歴理系女子の受ける暴力」があるが、社会が変わっていくことで軽減されるのではと希望を抱いている部分もある。その一つに「理系学部の女子枠」の設置がある。私は女子枠の設置について「マクロな視点では賛成・ミクロな視点では反対」という立場だ。マクロな視点では、先に述べた「数の暴力」を解決してくれる希望がある。例えば理系女子が増えれば「女子トイレの鍵壊れている問題」も蔑ろにされていなかった可能性があるし、「数の暴力」が理由で排他されてしまっていた気の弱い理系志望女子が救済される可能性がある。ミクロな視点では、一人一人を考えた時にやはり不利益を被る男子が出てくることはかわいそうだという思いがある。しかし、社会に大きな転換をもたらすには多少の犠牲は必要と考え、どちらかというとな賛成の立場である。

また、暴力を軽減する社会の変化の一つに「大学入試の共通テストの一発勝負取りやめ」が議論に挙がっていることがある。もし実現すれば、多くの女子が苦しめられる生理と試験日が重なってしまう問題が軽減される希望がある。先に述べたように私は受験期も月の半分が生理によって不調で、それがテストに影響してしまっていた。ピルで生理日をずらそうとしたこともあったが、思春期の生理周期は定まっていないことも多く、予定通りに行かなかった。一発勝負でなくも複数回あったら、体調を見てピルによる調整をすることができる可能性が増える。少なくとも高校生だったころの私からしたら嬉しい制度だ。

V. 暴力との戦い

高学歴女子・高学歴理系女子が受ける暴力は多い。アイドルユニット「学歴の暴力」の名

前は、一見すると高学歴女子が能力を用い無双しているイメージであるが、実は「学歴によって受ける暴力」という意味がある。私たち高学歴女子は日々この小さな暴力の積み重ねと戦って、声を上げ続ける必要がある。私たちはこの暴力に負けない。